

エッセイ

Reconnect, Restart

フィリピン「慰安婦」問題の現在

熊野 沙織

フィリピン人「慰安婦」問題のことで、エッセイを書いてみてはどうかと藤目先生から激励されたのは今年 5 月末のこと。私は、2015 年に「フィリピン政府の「慰安婦」問題への対応」を脱稿したが、それからすでに 4 年が経過していた。その間フィリピンでは 2017 年 12 月に「慰安婦」像が建てられ、2018 年 4 月に撤去されたが、私は報道で知りえる以上のことを把握していなかった。藤目先生からフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学在学中のセリーン・メルカードさんが「慰安婦」問題の企画展をされたと聞いて、写真を見た時は、今までにないアプローチに新鮮さを感じ、負けてられない、私もできることを頑張らないと！と奮起するような気持ちになった。

こんにちは日本では、若い女性たちが立ちあがり、「週刊 SPA!」の記事に対する署名活動¹を行って、編集部から謝罪を引き出し、話し合いを行ったり、「性的同意」という新しい概念を紹介したり、公教育では必ずしも十分に教えられない性に関する知識を広めるための動画を投稿したり、女性が職場でヒールを履くことを求められる風習を変えようとしたりと、目覚ましい活動をしている。3 月に 4 つの性暴力事件の公判が立て続けに無罪判決を下したことに抗議し、4 月 11 日に東京で始まったフラワーデモはじわじわと広がり、21 の都道府県で実施されるようになっていく(2019 年 10 月現在)。「慰安婦」問題に関して言えば、ミキ・デザキ監督によるドキュメンタリー『主戦場』が公開され、第 4 世代フェミニスト社会派アーティストグループ「明日少女隊」が「慰安婦」問題を題材にしたパフォーマンスを行い、「あいちトリエンナーレ 2019」で企画展「表現の不自由展・その後」が企画されるなど、何かが変わっていくのではないかという希望を感じていた。ところが同企画展は、公開からわずか 3 日で脅迫を受けて公開中止となり、個人的には冷水を浴びせられたような心地を抱えつつ、フィリピン「慰安婦」問題の情報をアップデートするべく、2019 年 8 月 25 日から 5 日間マニラを訪れた。

¹ 2018.12.25 号で「ヤレる女子大学生 RANKING」と題して、セックスしやすい(=ヤレる)女性の外観とそのような女性が多い大学をランキング形式で掲載した特集記事に対して、「女性を軽視した出版を取り下げて謝って下さい」と題した署名。インターネット上で 52,551 人の賛同者を集めた。

リッチーさんとの思い出

フィリピンに行くにあたっての、当初の私のミッションは、病気のためフィリピン「慰安婦」団体リラ・ピリピーナ(LILA Pilipina)²のコーディネーターの役割を辞してソルソゴン州に帰郷した、リチルダ・エクストゥレマドゥラさん(以下、リッチーさん)に会うこと、そして彼女の念願だった、ロラズ・ハウス(リラ・ピリピーナの事務所。ロラはタガログ語で「おばあさん」を意味する)を小さなミュージアムに改装する計画の進捗を知ることだった。しかし、結論からいうと、今回の旅で彼女に会うことはできなかった。

私がリッチーさんと親しく関わるようになったのは、2013年7月ごろからである。当時私は、修士論文の資料収集と取材のために、ロラズ・ハウスの2階に宿泊していた。事務所の四方の壁のうち一面には、元「慰安婦」女性たち(以下、ロラ)一人ひとりの写真がずらりと展示され、また別の壁にはロラが製作したとみえる絵やキルトが飾られていた。棚の中には膨大な量のリラ・ピリピーナが聴き取ったロラの証言のファイルや、抗議文や集会資料などの種々の文書、新聞記事のスクラップが保管されていた。私は、それらの資料を閲覧したり、フィリピン公文書館に通い、戦時性暴力に関するBC級戦犯裁判³の記録を収集していた。

リッチーさんは、私がリラ・ピリピーナに保管されている資料を閲覧する時も、ロラたちから話を聞く時も、親切でありつつ、同時に、大変慎重であった。「これまで、何人もこの研究者が、ここから資料を持ち出して、結局返してくれなかったし、書いたものを見せに来てくれなかった。だからあなたも、資料をこの部屋から持ち出さないで」と、憤懣やるかたなしといった調子で彼女は言った。私は、新聞記事を写真撮影する以外のことはしないと堅く約束した。当時私は、ロラたちの戦時性暴力被害については様々な記録があるが、被害を受けた後の長年の苦難や、運動に合流してから現在までについての記録は限られていることから、多くのロラたちから戦後70年間の生に焦点を当てた話を聞き取りたいと念願していた。しかしながら、こうしたいつもと違う証言の依頼にリッチーさんは懐疑的であった。元「慰安婦」女性たちの証言は、「『慰安婦』被害はなかった」「日本という国を貶めるための嘘の証言をしている」などと主張する否定論者たちにより、齟齬を追及され、信憑性を否定され続けており、フィリピンも例外ではなかった。リッチーさんは、代表者として、ロラたちを守らねばならないという責任感を強く持っており、私が書いたものがそのように利用されることを懸念している様子であった。

毅然とした姿の一方で、ロラたちとテレビを囲み、韓流ドラマを見たり、ABBAのカラオケを楽しむ陽気な一面もあった。「今は忙しいからできないけど、私の夢は、いつかロラたちとの思い出を書くこと」と彼女は言っていた。

リッチーさんは、リラ・ピリピーナも加盟している女性団体ガブリエラ(GABRIELA)⁴の

² 正式名称は Liga ng mga Lolang Pilipina(「フィリピンのおばあさんたちの同盟」の意)。1994年5月に発足した、フィリピン最初の「慰安婦」当事者及び支援者の団体である。

³ 第二次世界大戦で非戦闘員や捕虜の殺害や虐待といった「通例の戦争犯罪」と「人道に対する罪」を命じた者や実行した者を裁いた裁判。

⁴ マルコス独裁政権下の1980年代前半に誕生した、社会正義・公平・自由・民主主義を求める、労働者・農民・都市貧困層・中産階級・学識者・宗教者などの個人・女性団体の

メンバーであり、フィリピンの民主化を強く念願し、フィリピンが米国の実質的な植民地であることに反対する活動家であった。「私たちの活動は単なる平和運動ではない」と彼女は言った。フィリピン人「慰安婦」問題と、現在も続く米軍の駐留、その周辺での人権侵害や女性に対する暴力はひとつながりの課題であるという意味だった。

2015 年末に所謂「日韓合意」がなされた際、リッチーさんは、マニラ新聞の取材に対して「被害者が望んでいた合意内容ではない」「今回の合意によって、今後一切、『慰安婦』問題が触れられなくなる可能性がある」「被害者の女性も高齢化しており、問題が忘れられてしまうことを懸念している。元『慰安婦』たちが求めているのは謝罪と正義だ」とコメントし、「慰安婦」問題の議論化を避けているフィリピン政府の支援を引き出すため、今後も抗議活動が続けると表明した⁵。しかし、内心は失望が大きかったようで、2016 年のアジア連帯会議でリッチーさんに会った、日本軍「慰安婦」問題・関西ネットワークの方清子さんによると、「フィリピン政府は、元『慰安婦』女性の声を聴いてくれないが、韓国政府は毅然とした対応をしてくれており、それが希望だった。でも、日韓合意で希望を失った」と力を落としていたとのことだ。

リッチーさんは、2016 年 11 月に日本軍「慰安婦」問題解決全国行動主催の集会「日韓『合意』は解決ではない アジアの『慰安婦』被害者たちは訴える！」で証言するロラ・エステリータに同伴して来日した。その時の彼女は新たな目標を持っていた。「ミュージアムを作りたいの」と彼女は言った。「韓国の『戦争と女性の人権博物館』に行ってきたけど、お金もないし、あれとは違う感じにしたいの。ロラズ・ハウスは、ロラたちが集まる場。だからここに来れば一人ひとりのロラの人生がわかる温かみのある場所にしたい。フィリピンの「慰安婦」問題のこと、運動のこと、ロラたちの足跡のこと、全部わかるような場所に。」そのために、ロラたち一人に一冊のファイルを作り、そこにそのロラの証言や、集会などでの発言、運動への関わりをまとめて、ファイルを見ればそのロラのことがわかるようにしたり、ガラスケースに遺品を展示したり、ロラたちが描いた絵を展示したいと話していた。

私は、微力ながら何か協力したいと感じ、これまで書いた論文の抜き刷りや、フィリピンで購入していた小物をバザーで売ってほんのわずかばかりのお金を作った。2017 年 11 月にそのお金を渡すためにリラ・ピリピーナを訪れた際、リッチーさんは驚くほど病みやつれており、私はショックを受けた。持病の糖尿病が悪化し、座っているのも辛そうな様子であった。「ガブリエラからは、代表を交代するという話も出ているけど、私は交代したくないの」とリッチーさんは言っていた。長年リラ・ピリピーナの活動に献身し、何人ものロラたちを見送ってきたリッチーさんの気持ちが痛いほど伝わってきた。

連合。2000 年代前半には「ガブリエラ・ウィメンズ・パーティーリスト」を傘下に組織し、下院に議席も獲得している。

⁵ マニラ新聞 2016.1.7「日韓合意を受け、比の元慰安婦らが「他国慰安婦も議論上に」と記者会見して訴え」



2014年5月アジア連帯会議にて、
ロラ・エステリータとリッチーさん(右)(筆者撮影)

忘却に抗う会(仮)は、フィリピン「慰安婦」問題の資料保存を支援する期間限定のキャンペーンです

「慰安婦」問題は、フィリピンにもありました

第二次世界大戦中、旧日本軍は侵略した国・地域で次々に「慰安所」を設置。それはフィリピンも例外ではありませんでした。フィリピンでは、軍が正規に設置した「慰安所」に加えて、軍の統治・作戦中に女性(たち)を輪かん・監禁するという二次的な「慰安所」設置も行われました。「慰安婦」とされたことを名乗り出た女性は約400人にのぼります。

問題は未解決。忘却に抗うために資料の保存を

日本政府が1996年から、市民から集めた募金を元「慰安婦」女性に支給した、いわゆる「国民基金」。「国庫からの賠償ではない、納得できない!」という声がフィリピンでも挙がりましたが、多くの女性が貧困を背景に受け取りました。しかし、「受け取りはしたけれど、公式謝罪・賠償を求め続ける」と運動は続いてきました。けれども、多くの女性たちが高齢化し、解決どころか、記憶の継承が危ぶまれています。フィリピンの団体「ロラズ・センター」の代表のリッチーさんの願いは、「ロラたち1人1人の写真・使った品物・発言の原稿を展示し、ロラたちの生き、闘った足跡を辿れる、手作りの資料館をつくりたい。」展示のための建物の修繕、ファイル、陳列ケース、資料の整理が必要です。そのための資金提供に微力ながら協力したいと考えています。

資金集めをする際に使用したコンセプトペーパー

それ以来、私はリッチーさんに会えていない。リッチーさんは2018年1月に、ソルソゴン州に帰ったとのことだ。今回の旅でも、最後までリッチーさんやご家族とは電話が繋がらず、ソルソゴン州のご自宅を訪問することは断念せざるを得なかった。共通の知人や、リラ・ピリピーナのメンバーに聞いてみても、彼女たちも連絡がつけられない状態であるという。彼女と再び連絡が取れるようになることを願っているし、本人が言っていた、ロラたちとの思い出をぜひ私も読ませてもらいたい。どうかそれが書ける体調であってほしいと思っている。

「慰安婦」像のこと

私のフィリピンへの旅のもう一つのミッションは、「慰安婦」像の建立と撤去について、詳しい状況を知ることであった。報道から得られる情報だけでは、像を建てた主体が不明確であったため、背景を知りたいと思ったのだ。

ロハス大通り沿いの湾岸遊歩道に「メモラーレ(記憶)」と名付けられた女性の像が設置されたのは、2017年12月8日のことである。フィリピンの女性用正装「フィリピーニャーナ」を着用し、心の傷を象徴する目隠しをした女性のブロンズ像で、台座を入ると高さは約3メートル⁶。像の台座である記念碑にはタガログ語で、「この像は1942年から1945

⁶ マニラ新聞 2018.1.22 「マニラ湾遊歩道に立つ慰安婦像のデザイナーに話を聞く。像の目隠しは「心の傷」」

年の日本占領期に虐待の被害者となったすべてのフィリピン人女性を記念するものである。彼女たちが自らの経験について証言し陳述するまでには何年もの月日を要した」と記された。



Kaisa Para Sa Kaunlaran の機関誌「橋 Tulay」編集部撮影。許可を得て掲載

この像を建てるプロジェクトについて、私はリッチーさんから直接聞いたことがなかったのだが、報道によるとリッチーさんは除幕式にも参加し、インタビューに応じて「私は像の女性がフィリピンナーナを着るよう提案した一人です」とコメントしている⁷。

像の除幕式の時期は、リッチーさんが活発に活動することが困難であった時期に重なっているため知ることが難しいかと思われたが、今回の旅では当時の状況について Kaisa Para Sa Kaunlaran⁸のテレシタ・アン・シーさんに聞くことができた。テレシタさんの説明によれば、像の設置の経緯は 2013 年まで遡る⁹。トゥライ財団¹⁰の代表者(当時)であり

⁷ Xinhua 2017.12.8 “Feature: Philippines unveils World War II sex slave statue in Manila” http://www.xinhuanet.com/english/2017-12/08/c_136811717.htm

⁸ Kaisa Para Sa Kaunlaran (菲津濱華裔青年聯合会: Unity for Progress)は中国系コミュニティのフィリピン社会への統合を目指す団体であり、テレシタさんは著名な社会運動家である。Kaisa Para Sa Kaunlaran のウェブサイトによれば、同団体は 1987 年の設立以来、文化・教育事業として機関誌の発行や博物館・資料館の運営、また社会開発事業を行っている。テレシタさんは、「慰安婦」像設置の際、各方面から意見を求められたとのことだ。

⁹ 2019 年 8 月 28 日、Kaisa Para Sa Kaunlaran 事務所にてテレシタ・アン・シー氏より筆者聴き取り。

¹⁰ 中国系フィリピン人の団体。マニラ新聞 2017.12.11「フィリピン国家委員会はマニラ湾遊歩道に比初となる慰安婦像を設置」によれば、同団体は 2013 年には写真展「太平洋戦

Wha-Chi(第二次世界大戦中、フィリピン人ゲリラと共に日本軍に抵抗した中国人ゲリラ)として日本軍の捕虜になったこともあるマニエル・チュア氏に、リラ・ピリピーナが、「慰安婦」像を建てる協力を依頼したとのことだ¹¹。(逆に、チュア氏から、リラ・ピリピーナに申し入れたとも言われており、そのあたりははっきりしない。)いずれにせよチュア氏は資金繰りを開始し、2014年5月26日、トゥライ財団はマニラ市に「慰安婦」像を建てるにあたっての設置場所と方法に関して支援と技術的助言を求めた¹²。

私は、今回の旅で現在のマニラ市 観光・文化局(Tourism & Cultural Affair Bureau)の責任者に会い、像の設置にあたってのメモランダムや市議会決議はないか質問したが、後任者であるため、像については何も知らないとのことだった¹³。同氏の理解では、像はトゥライ財団の所有物で、マニラ市の所有物ではなく、したがってメモランダムも存在しない、またロハス大通り沿いのエリアは確かにマニラ市にあるが、管理はフィリピン政府関係部署がしているため、像の設置許可もマニラ市がしたわけではないとのことであった¹⁴。

そこで、以下では報道資料を元に、像設置の経過を追ってみたい。トゥライ財団から助言を求められたマニラ市では、公共事業局が、Grand Boulevard Hotel の向かい、Filipino Family と Seaman Statue の間に像のための場所を特定した¹⁵。この時、マニラ市公共事業局は像設置について特に異論を差し挟まなかったが、関係省庁の承認が前提であるとした¹⁶。他方でマニラ市は国家機関である国家歴史委員会(National Historical Commission of the Philippines。以下、NHCP)¹⁷に照会し、2015年5月11日付でNHCP 事務局長ルドヴィコ D.バドイ氏によって「慰安婦像として設置場所は妥当」とされた¹⁸。

チュア氏は、作品を目にしたことがあり良いと思ったため彫刻家のジョナス・ロセス氏に像の作成を依頼した¹⁹。しかしチュア氏は像の完成を見ぬまま、2015年5月に死去し、計画は息子のドリアン・チュア氏が引き継ぎ、やがて像が完成した²⁰。同氏は2017年10

争中の旧日本軍の残虐行為」を開催した実績をもつ。

¹¹ 前掲テレシタ・アン・シー氏より筆者聴き取り。

¹² マニラ新聞 2017.12.22「マニラ市は外務省に対し慰安婦像設置の経緯など説明。市は設置を支援と文書送付」。この文書は、外務省に12月20日付で送付され、ABS-CBN News の Twitter で写真を見ることができる。

(2017.12.21 2:13 “READ: Manila City Hall's response to DFA regarding the “comfort woman” statue along Roxas Blvd. | via @michael_delizo”)

¹³ 2019年8月28日、マニラ市 観光・文化局チャーリー・ドゥンゴ氏のオフィスにて同氏より筆者聴き取り。

¹⁴ 前掲チャーリー・ドゥンゴ氏より筆者聴き取り。

¹⁵ 前掲マニラ新聞 2017.12.22 並びに ABS-CBN News Twitter 2017.12.21 2:13

¹⁶ 前掲マニラ新聞 2017.12.22 並びに ABS-CBN News Twitter 2017.12.21 2:13

¹⁷ 文化遺産国際協力コンソーシアム(2014)『平成24年度協力相手国調査フィリピン共和国調査報告書』によれば、2009年の共和国法第10066号においては、NHCPは「フィリピン史。特に歴史および英雄に関する重要な動産及び不動産文化財の保全」を行う文化機関であると定義されている。NHCPのホームページには、フィリピン史の促進を所管する主たる政府機関として、「国家的聖地、モニュメント、史跡、建造物、歴史的文化的に重要な価値があるランドマークを、管理、維持、認定する」とある。

¹⁸ 前掲マニラ新聞 2017.12.22 並びに ABS-CBN News Twitter 2017.12.21 2:13

¹⁹ 前掲テレシタ・アン・シー氏より筆者聴き取り。

²⁰ 前掲マニラ新聞 2018.1.22

月23日付で、12月8日に除幕される予定の像の台座となる歴史記念碑(Historical Marker)の作成をNHCPに依頼した²¹。

今回の旅で私のインタビューに応じてくれた NHCP のジュアンさんは、まさに「慰安婦」像の歴史記念碑に携わったそうだが、職務として、きちんと事実関係を調べ、碑文を考案する仕事を全うしたのであろうという印象を受けた。ジュアンさんの説明によれば、NHCP が歴史記念碑を設置する際は、NHCP が主導して設置する場合と、依頼を受けて設置する場合の2通りのパターンがある²²。後者の場合、依頼は部局(Division)の長に上げられ、妥当性が判断される。妥当であると判断された場合、所属の歴史研究者によって研究が行われ、碑文が考案される。この研究結果と碑文案は、NHCP の役員会で校閲・承認される。妥当性の判断については、フィリピン全国に関連する事柄であるかが考慮される。例えば、ある地域に顕著な貢献をした人物の碑の依頼であった場合、該当する地域の自治体で作成するよう勧告されるという。研究結果と碑文は役員会によって11月24日に承認され、歴史記念碑は着工した。

以上をまとめると、「慰安婦」像はトゥライ財団が、その台座の歴史記念碑は NHCP が作製したということである。そして日本軍が真珠湾を奇襲しフィリピン侵略を開始した日である12月8日が、除幕式に選ばれた。

報道によれば除幕式はNHCPによって行われたもので、NHCPの代表であるレーネ・エスカランテ氏は「第二次世界大戦中の最も重大な犯罪の一つは民間人女性に対する虐待であった。何千人もの女性たちが被害を受け、その多くが自身の話をカミングアウトすることを今もためらっている」と話し、更に何人かの生存している被害者が今も彼女たちにふさわしい正義を求めて闘っていることに言及した²³。マニラ市長の代理人としてマニラ市行政官のエリクソン A・アルコヴェンダス氏も出席していた²⁴。テレシタさんによると、この時期には、日本大使館が像を歓迎しないであろうことを、関係者は承知していたため、除幕式は密かに行われたという²⁵。

関係者の危惧は的中し、像設置に対して日本大使館は直ちに抗議を申し入れた。12月11日、「日本政府の立場と相いれず、極めて残念だと大統領府と外務省に伝えた」と明かした²⁶。日本大使館はマニラ市にも申し入れを行った²⁷。12日には菅義偉官房長官が「諸外国における慰安婦像の設置は我が国の立場と相いれない極めて残念なことだ」と遺憾の

²¹ 2019年8月27日、NHCPにて Research, Publication, Heraldry Division 所属の研究者ジョアン・パオロ・カラムラン氏より筆者聴き取り。以下、NHCPの歴史記念碑設置のプロセスは同氏への聴き取りと、同氏より入手したNHCP内部資料に依拠する。

²² 前掲ジョアン・パオロ・カラムラン氏より筆者聴き取り。

²³ マニラ新聞 2017.12.9 “Memorare to Philippine comfort women unveiled in Manila”
<http://www.manila-shimbun.com/category/english/news234673.html>

²⁴ Philippine Daily Inquirer 2017.12.20 “Manila ‘comfort woman’ statue raises thorny issue with Japan”
<https://globalnation.inquirer.net/163097/manila-comfort-woman-statue-raises-thorny-issue-japan>

²⁵ 前掲テレシタ・アン・シー氏より筆者聴き取り。

²⁶ マニラ新聞 2017.12.12 「日本大使館が遺憾の意伝える。「良好な日比関係に影響ない」と大統領報道官」

²⁷ 前掲 Philippine Daily Inquirer 2017.12.20

意を述べ、フィリピン政府に対して設置の経緯などを確認するとともに、日本政府の立場を申し入れたことを明らかにした²⁸。21日、フィリピン訪問中の堀井巖外務政務官は、フィリピン外務省アラン・ピーター・カエタノ長官に「日本の立場と相いれず極めて残念」と改めて伝えた。1月9日には野田聖子総務大臣が来比しドゥテルテ大統領と会談、「日本としては非常に残念である。これまで、フィリピンは、先の大戦からお互い色々問題を抱えながらも未来志向で親しい関係を築きあげてきたので、その関係を続行していくために、日本とフィリピンの間で、しっかりこれからの先行きについても話して頂きたい」と伝えたという²⁹。

ドゥテルテ大統領は就任後間もない2016年8月11日、記者会見で機会があれば「慰安婦」問題について日本政府との間で議題に上げると示唆したことがある³⁰。これは、就任直後のドゥテルテ大統領が、フィリピン共産党との和平交渉を開始し、左派活動家出身の知識人を複数名閣僚に入れる方針を取っていたことと無関係ではないだろう。登用された左派系閣僚の中には、女性団体ガブリエラのメンバーとして出馬し下院議員を務めたこともあるリサ・マサ氏もあり、ガブリエラ(そしてその加盟団体であるリラ・ピリピーナ)も多少は新政権に期待を寄せていたのではないかと推察される。しかし、2017年5月にはフィリピン共産党との和平交渉は中止し、左派系閣僚も退任していった。

ドゥテルテ大統領は米国に対する挑発的な言説を繰り返しており、中国・ロシアと友好的な関係を構築しているものの、米国との軍事演習や国内の「対テロ」作戦への米国の介入は継続しており、極めて良好な日比関係を維持している。2018年1月16日、ドゥテルテ大統領は記者会見で、野田総務大臣との会見について「慰安婦」女性やその関係者たちには、像を通して自身の意見を表現する表現の自由がある」と伝えたと話した。また、日本政府は像の撤去を求めたのではなく遺憾の念を表したのだとし、撤去するかどうかはマニラ市長によると話した。また、像について政府の政策によって建てられたわけではないとした³¹。

像に関しては、何者かによってプレートの文字を消されていたことが2018年3月に判明するハブニングがあったものの、しばらくの間、撤去されることはなかった。しかし4月27日の夜中10時に突如撤去された。撤去したのは国家機関である公共事業道路省であり、ロハス大通り沿いの「慰安婦」像を含む銅像3体を「洪水対策工事のため撤去した」と説明した。報道によると、日本大使館関係者は「比政府から事前に連絡があった」と述べ、撤去が政府当局の判断で行われたとの見解を示したという³²。こうして、フィリピン

²⁸ 朝日新聞 2017.12.12 「マニラの慰安婦像設置「極めて残念」菅官房長官」

²⁹ 総務省 Web サイト「会見発言記事 野田総務大臣のフィリピン共和国ドゥテルテ大統領への表敬後ぶら下がり記者会見の概要 平成30年1月9日」
http://www.soumu.go.jp/menu_news/kaiken/01koho01_02000656.html

³⁰ マニラ新聞 2016.8.13 「大統領、元慰安婦問題を日本政府との議題に上げる可能性を示唆」

³¹ Minda News 2018.1.16 “Duterte on ‘Comfort Women’ monument: it’s freedom of expression”
<https://www.mindanews.com/top-stories/2018/01/duterte-on-comfort-women-monument-its-freedom-of-expression/>

³² マニラ新聞 2018.4.29 「慰安婦像撤去を巡り女性団体など相次ぎ批判。比政府が「事前

は世界で唯一、「慰安婦」像を撤去した国となった。

ドゥテルテ大統領は 29 日未明会見を行い、「私有地に建てるのは問題ないが、政府を利用すべきではない。他国と敵対することは比の方針でない」「日本は(償い金を)早期に支払っており謝罪もしている」「私の考えとしては、終わった問題」などと述べ³³、「慰安婦」問題についての歴代大統領の立場を踏襲する形となった。

元大統領にしてマニラ市長(当時)のジョセフ・エストラダ氏は、インタビューに応じて、「私たちのシステムに悪い歴史を残しておかない方がいい。過去に起こった悪いことと一緒に埋めてしまった方がいい³⁴」と語ったという。

像撤去後の「慰安婦」問題の広がり

「慰安婦」像撤去は、フィリピンで大きく報じられた。フィリピン最大の放送局 ABS-CBN はニュースでこの問題を取りあげて放映し、ドゥテルテ大統領の記者会見、女性団体による記者会見のほか、インタビューに応じた歴史学者カール・イアン・チェン・チュア氏によると、「日本政府の『慰安婦像』に対する反応はいつも同じであるが、像の撤去は他国では例を見ない」という発言も報じた³⁵。フィリピンの主要な総合紙のうち、保守系の Manila Bulletin 紙の関連記事は数点であるが、The Dairy Inquirer 紙と The Philippine Star 紙では数日にわたって経過が報じられた。新聞論調では、「ある国が、様々な形の威圧をもって、他の国の歴史を抑圧しようとすることは、モラルの蹂躪である。しかしながら、自国の政府がこの犯罪に共謀し、自国民の信頼を裏切るならば、それはさらに重大な犯罪である。フィリピン政府によって内密に像が撤去されたことはフィリピン人と自由の尊厳を信じる全ての人に対する重大な侮辱である³⁶。」などの厳しい批判がされた。

同年 12 月には、ラグナ州サンペドロ市で民間の介護施設に平和の少女像が設置された。これに対しても日本大使館は、フィリピン大統領府と外務省にロハス大通り沿いの「慰安婦」像の時と同様の申し入れを行い、像が設置からわずか 2 日後に撤去されると³⁷、この

に通知」と日本大使館」

³³ マニラ新聞 2018.5.30 「慰安婦像撤去に対し「私有地に設置なら良い」と大統領。「終わった問題」とも話した」

³⁴ Philstar 2018.4.29 “Comfort woman statue in Manila removed”

<https://www.philstar.com/nation/2018/04/29/1810401/comfort-woman-statue-manila-removed>

³⁵ ニュース映像は以下で観ることができる。<https://news.abs-cbn.com/video/news/05/01/18/comfort-woman-statue-dadaan-sa-design-revision>

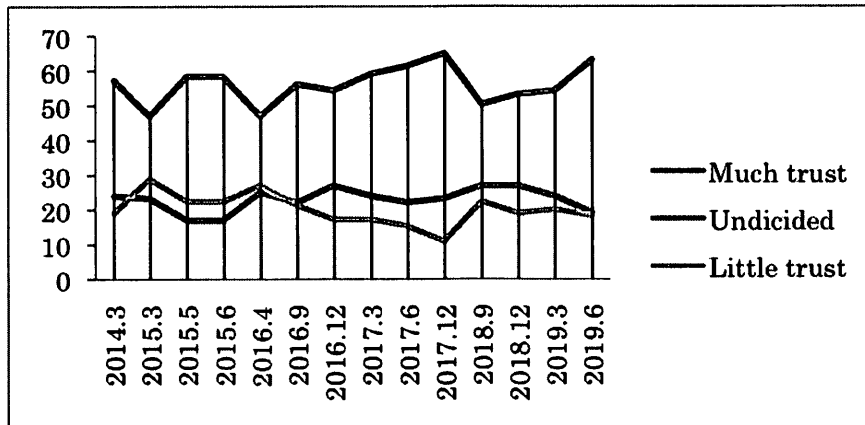
³⁶ Inquirer.net 2018.5.8 “Comfort Woman Statue’s stealth removal a moral, historical outrage By: Cecilia Gaerlan”

<https://usa.inquirer.net/12101/comfort-woman-statues-stealth-removal-moral-historical-outrage>

³⁷ マニラ新聞 2019.1.2 「ラグナ州サンペドロ市の介護施設内に設置された慰安婦「少女像」が撤去される」などのマニラ新聞の一連の報道によれば、像はサンペドロ市長(当時)が 2017 年 9 月に韓国堤川市を訪れた際、同市内の平和の少女像を訪れ、「平和と友情の像」という理解で堤川市と話し合い設置に至った。像が完成した 2018 年、サンペドロ市長(当時)はソウルの日本大使館前などにある像と同じものであることを知り、設置に否定的な見解を伝えていたが、最終的に「平和と女性のエンパワメントのための記念碑」として設置さ

出来事も各紙で報じられた。

しかし、フィリピンの日本に対する世論は依然として概ね良好である。Social Weather Stations 社の世論調査を見ると、2018 年 9 月時点の日本への信頼度は前の回と比べると 15%低下している。最初の像撤去から約半年後の調査ではあるが、低下の理由は像撤去と無関係ではないだろう。しかし日本への信頼度はゆるやかに回復している。テレシタさんなどの関係者は、像の撤去後、フィリピン社会全体で「慰安婦」問題への関心が高まり、日本政府やドゥテルテ大統領を強く批判する世論が形成されたとはいづらいという見解のようだ。



Social Weather Stations 社世論調査より筆者作成

しかし、像の撤去により、新たな「慰安婦」問題のアクターが現れつつある。それが、像の設置に尽力した団体を中心に結成された、フラワーズ・フォー・ロラスキャンペーン (#Flowers4Lolas Campaign) である。同団体の Facebook ページによると、フラワーズ・フォー・ロラスキャンペーンは、第二次世界大戦中に日本軍によって性奴隷とさせられた何千人もの女性達の記憶を尊重するための世界的な運動と連帯し、像を公共の目を引く場へ再設置することと、フィリピン人の尊厳を守り、フィリピンの歴史を外国によって修正されることに反対する団体・個人の連合である³⁸。そこには、リラ・ピリピーナとマラヤ・ロラズ、そしてそれぞれを支持してきた女性団体、更には、テレシタさんが所属する Kaisa Para Sa Kaunlaran を初めとする中国系フィリピン人団体、そして第二次世界大戦の生存者やその子孫の団体などが名を連ねている³⁹。フラワーズ・フォー・ロラスキャンペーン

れた。撤去の理由として、サンペドロ市長は「日本との友好関係を傷つける意図はなく、混乱や議論を避けるために撤去した」と説明した。

³⁸ フラワーズ・フォー・ロラスキャンペーンの Facebook ページの 2018.6.7 のポストによる。

³⁹ フラワーズ・フォー・ロラスキャンペーンの Facebook ページの 2018.6.7 のポストには、次のような団体名が挙げられている。“Lila Pilipina, GABRIELA | A National Alliance of Women, WomenHealth Philippines, Memorare Manila 1945, KAISA Para sa Kaunlaran, Bataan Historical Legacy, Center Law, Movement for Restoration of Peace and Order, DIGNIDAD Coalition, KALAYAAN, Knights of Rizal, Education for Social Justice Foundation, UP Lipunang Pangkasaysayan (UP LIKAS), Knights of Rizal (Sucesos Chapter), Education for Social Justice Foundation, and students and professors from the various universities.”

の活動の様子からは、像の撤去を契機として、「慰安婦」問題の運動の輪が広がり、活性化したように思われる。この連合を中心にして、6月12日の独立記念日や終戦記念日前日の8月14日に像の撤去を批判し、再設置を求める内容の集会が行われ⁴⁰、ドゥテルテ政権とは距離を置いているバクララン教会(首都圏パラニャケ市)への像の設置に向けて関係者は奔走し始めた⁴¹。関係者は、フィリピン国内に、日本軍の戦死者を記念する碑が複数あることをフィリピン社会が許容しているのに、日本政府が「慰安婦」像に圧力をかけることにも、怒りの声を上げている。

像の撤去による影響は他にもある。2019年3月16日から4月30日まで、アテネオ・デ・マニラ大学では、同大学の学生であるセリーン・メルカードさんによってフィリピン人「慰安婦」をアートという切り口で表現した企画展が開催され、話題を呼んだ。

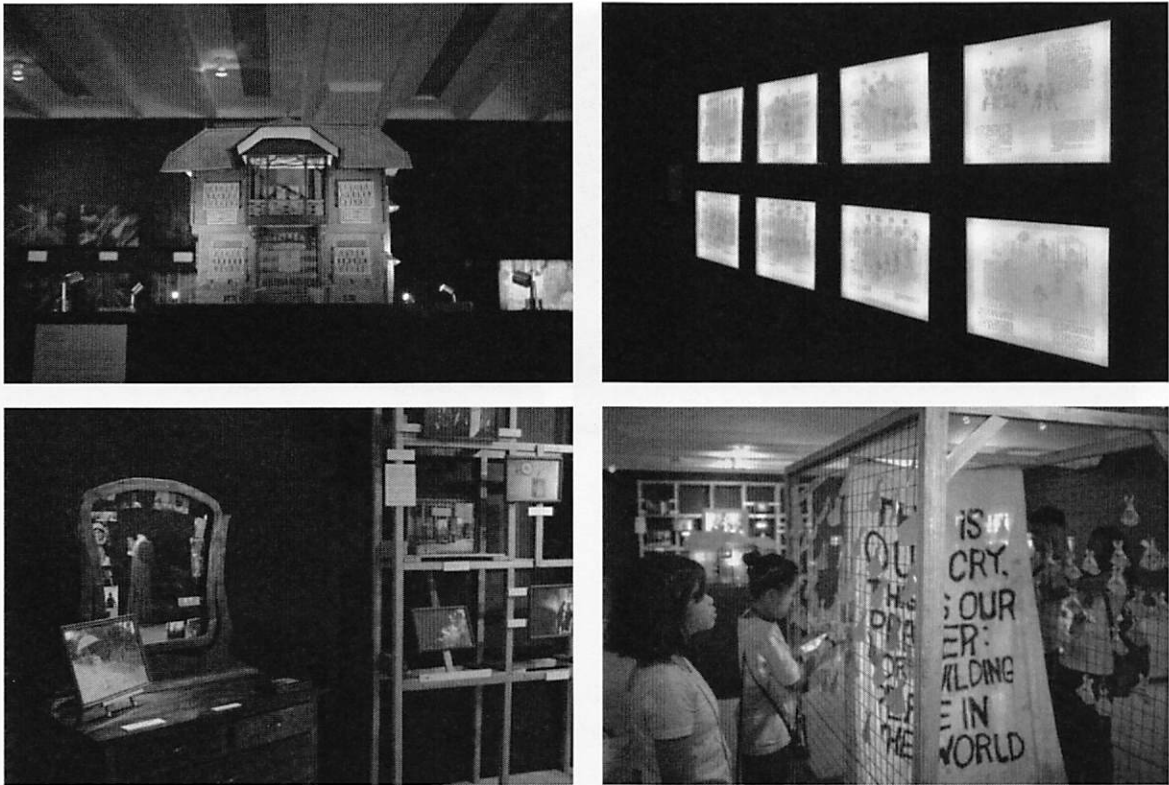
マニラ滞在中、セリーンさんにインタビューをすることができた⁴²。長い黒髪の女性が多いフィリピンでは珍しいショートカットに、お洒落な眼鏡姿という、美術専攻の学生らしい出で立ちのセリーンさん。彼女の曾祖父は、戦前、フィリピンに教師としてやってきて、帰国令によって日本に帰った日本人だという。彼女の祖母は、曾祖父と直接会ったことはなく、セリーンさんも詳しいことはあまり聞いたことがないとのことだが、こうした家族の歴史により、セリーンさんは、日比関係と、戦時の女性と子どもに関心があり、歴史が西洋や男性の視点で書かれてきたことへの問題意識を持ってきた。そして、米国でホロコースト博物館など、戦争に関する数々の博物館に足を運んだことで、メモリー・スタディーズに出会い、フィリピンにも同じような、記憶を語り継ぐための博物館があればと思うようになったという。

そんなセリーンさんだが、「慰安婦」問題については小学生のころ学んだきりであり、詳細については知らなかったし、ロラに会ったこともなかった。しかし、「慰安婦」像の撤去がきっかけの一つとなり、展示のテーマに取り上げることにしたという。企画展のタイトル“*In The Spaces We Mend: Inheriting the unfinished narrative of Filipino Comfort Women*”の、“Space”には、「空白・隙間・ギャップ」と「対話し、表現し、議論の終結や相互理解を探るための場」という2重の意味を込めた。この場合の「空白・隙間・ギャップ」とは、「慰安婦」とされた女性たちの何十年にもわたる沈黙や、フィリピンで「慰安婦」問題が知られていないことや、子孫や世界の人々に記憶を伝えてきたホロコースト生存者と比べて、「慰安婦」とされた女性たちが、スティグマにより記憶を継承できてこなかったことを念頭に置いている。訳出するならば、「間隙を修復する場にてーフィリピン人「慰安婦」の未完成の物語を受け継いで」のような感じだろうか。

⁴⁰ マニラ新聞 2018.6.13「独立記念日に合わせ女性団体など、政府に慰安婦像の再設置を求める集会を開く」、2018.8.15「「世界慰安婦の日」で終戦記念日前日の14日、バクララン教会で慰安婦像再設置など求める集会」

⁴¹ マニラ新聞 2018.12.29「4月にマニラ湾沿いから撤去された慰安婦像の再設置に向けた動きが広がる」

⁴² 2019年8月28日、アテネオ・デ・マニラ大学付近にてセリーン・メルカード氏より筆者聴き取り。



企画展の様様（セリーン・メルカードさん提供）

初めて企画展の写真を見たとき、私は全ての物がアーティスティックに展示されている美しい写真に驚き、「慰安婦」問題では見なかったアプローチであると感じた。企画展では、彼女が所属するアテネオ・デ・マニラ大学の Library of Womens Writing(以下、ALiWW)に寄贈された、フィリピンで初めて名乗り出たロサ・ヘンソンさんの遺品や日本人支援者からの手紙のほか、レイテ島で被害に遭ったレメディアス・フェリアスさんが自身の被害について描いた絵本、若手アーティストによる元「慰安婦」女性の写真やアニメーションなどが展示された。セリーンさんは当初、撤去された像を展示するアイディアを持っていたが、政治的な色合いが強まると判断し見送り、アートの側面に焦点を当てることにしたそう。日本大使館やフィリピン政府の反応が懸念されたためであった。ロラたちの 90 年代以降の運動については、リーフレットで補完したという。

企画展には、延べ 800 名から 900 名が来館し、その多くが 15 歳以上の学生であったという。企画展を構想してから「慰安婦」問題について本格的にリサーチし、全てを一人で準備しなければならなかったため本当に大変だったそうだが、多くの若い世代が「慰安婦」問題に出会うことができる、素晴らしい仕事をされたと思う。



ALiWW 所蔵のロサ・ヘンソン氏の遺品（筆者撮影）



赤い家のミニチュアも企画展の後は ALiWW に寄贈された（筆者撮影）

「慰安婦」像の更なる設置

これまで、フィリピンでは異なる経緯で3点の「慰安婦」像が建立され、うち2点が撤去された。しかし1点は現在もそのままの形で残っている。

そのフィリピン3つ目の「慰安婦」像は、かつてガブリエラのメンバーとして、フィリピンで「慰安婦」女性たちが名乗り出るよう呼びかけるキャンペーンを推進し、フィリピン最初の「慰安婦」当事者団体リラ・ピリピーナの立ち上げに大きく貢献して、現在は3つ目の当事者団体であるロラス・カンパニェーラ代表を務めるネリア・サンチョさんの主導で建てられた。設置場所は、ビサヤ地方ボラカイ島対岸のパナイ島ア克蘭州マライ町ジョッティ港付近にあるネリア・サンチョさんの私有地で、像の横には小規模な資料館も作られた⁴³。像は故マリア・ロサ・ヘンソンさんと、マルコス政権下、国軍兵士にレイプされたネリア・サンチョさんの妹、故アグネス・サンチョさんが寄り添うデザインであり、像台座部には2人の名前とともに「慰安婦」、性暴力の被害者であることが刻まれている⁴⁴。像建設計画は2015年ごろに始まり、2017年に受け取ったマルコス戒厳令下での人権被害への補償金や国際団体の寄付を建設費用に、2018年7月ごろに彫刻家の手で完成したという⁴⁵。

⁴³ マニラ新聞 2019.2.6「ビサヤ地方ア克蘭州に新たに慰安婦像が除幕。兵士による性暴力被害者と寄り添うデザイン」

⁴⁴ 前掲マニラ新聞 2019.2.6

⁴⁵ 前掲マニラ新聞 2019.2.6



3点目の像(ネリア・サンチョさんのフェイスブックより)

この像に対しても、2月6日、在フィリピン日本大使館は、「わが国政府の立場と相容れない、極めて残念なことだ」との日本政府の見解を表明したが⁴⁶、2019年10月現在、撤去には至っていない。

更に2019年8月25日、私がマニラに着いたまさにその日には、フラワーズ・フォー・ロラスキャンペーンにより、バクララン教会の敷地内にロハス大通り沿いから撤去された像を再設置する記念式典が行われた。私は夜にマニラに着いたため、どのみち式典への参加はできなかっただろうが、翌朝の新聞で知って衝撃を受けた。すぐにバクララン教会へ向かったが、現場には像がなく、あったのは像の台座のみ。驚いて確認したところ、以下のような事実が分かった。

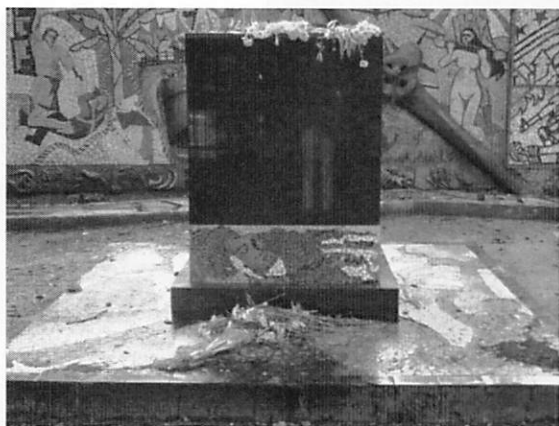
そもそも像が撤去された後、撤去の際にできた軽微の破損を修復するために、像は彫刻家のジョナス・ロセス氏の自宅に戻されていた。2019年6月に「像は市の所有物のため移動させる際には必ず市に許可を取る」と書かれた書面がロセス氏の元に送られたという⁴⁷。ただしテレシタさんの説明によれば、実際はマニラ市にあるのは維持責任であって、所有権はあくまでトゥライ財団にあり、その所有権も、トゥライ財団からフラワーズ・フォー・ロラスキャンペーンに寄付されたという⁴⁸。

⁴⁶ マニラ新聞 2019.2.7「日本大使館「極めて残念」ボラカイ対岸の慰安婦像設置」

⁴⁷ マニラ新聞 2018.12.29「4月にマニラ湾沿いから撤去された慰安婦像の再設置に向けた動きが広がる」

⁴⁸ 前掲テレシタ・アン・シー氏より筆者聴き取り。

像は8月15日にバクララン教会に設置する計画であったが、前日までロセス氏に連絡が取れず、やっと連絡が取れた時には、ロセス氏は「脅されている」と電話で話したという⁴⁹。結局、像再建は15日に間に合わず、後日ジョナス氏は、2名の身元不明の男性が像を持ち去ったと話した⁵⁰。そのため、25日の式典は像なしで行われたのである。フラワーズ・フォー・ロラスキャンペーンの関係者らは像を発見するか、新たな像を建設するかのいずれの形で、バクララン教会に像を設置することを目指している⁵¹。



設置された像の台座（筆者撮影）



教会参道脇のタイルアートの一部（筆者撮影）

リラ・ピリピーナの現在

私が、リラ・ピリピーナの新コーディネーターであるシャーロン・クバサオ＝シルヴァさんに会えたのは、マニラ滞在の最終日だった。シャーロンさんは、ネリア・サンチョさんの後輩で、ガブリエラで広報や外国団体との窓口を担当していた経歴を持つ。リッチーさんの体調不良を受けて、2017年10月からパートタイムでリラ・ピリピーナの活動に携わるようになり、2018年4月に正式にコーディネーターとなった。リッチーさんはこれまで長きにわたって、ほぼ一人でリラ・ピリピーナを切り盛りしていたが、シャーロンさんは、1990年代に「慰安婦」問題に携わっていたチームを集めてリラ・ピリピーナを運営している。

ロラたちはいよいよ老境に入り、リラ・ピリピーナの事務所に来ることができるロラたちは5名程度にまで減っている。体調不良と経済的な苦労に無縁なロラはおらず、リラ・ピラピーナは資金繰りに苦慮しつつ、ロラたちを支援している状態だ。リラ・ピラピーナでは、マニラ近郊のロラたちと、その遺族たち(PAMANA⁵²という団体に組織されている)15家族とコンタクトを取っているという。

他方で、全国のロラたちの様子を確認する調査活動を進めている。9月にはイロイロ市

⁴⁹ 前掲テレシタ・アン・シー氏より筆者聴き取り。ロセス氏は、誰に脅されているかについては明言しなかったという。

⁵⁰ 前掲テレシタ・アン・シー氏より筆者聴き取り。

⁵¹ 前掲テレシタ・アン・シー氏より筆者聴き取り。

⁵² タガログ語で「継承者」の意。

のガブリエラの支部を訪れ、イロイロ市で名乗り出たロラたちの消息を確かめ、ガブリエラの支部に残っている可能性のある、関連資料を収集する予定とのことであった。

リッチーさんが温めていた、ロラズ・ハウスを小さなミュージアムにする構想についてだが、残念なことに、保安上の理由で、今のところ保管している資料を公表することは考えていないとのことだ。その理由としてシャーロンさんは、日本政府が「慰安婦」についての碑や資料を撤去するためにあらゆる手段を講じる可能性があるためと説明した。現在は、担当者を配置して資料の分類整理・保存を行っているという。リッチーさんの念願が、当面形にならないことを知ってとても残念に思ったが、それ以上に、そのような状況を作り出している日本政府の態度に、強いストレスを感じる。

シャーロンさんは、海外の支援団体との関係の再構築を進めており、ロラとともに来日することも念頭に置いている様子だった。日本社会の状況は、ロラたちが名乗り出た時期と比べて遥かに「慰安婦」問題に対して否定的な論調が強く、サバイバーを温かく迎え入れる雰囲気とは言いがたいため、正直なところ手放して歓迎できる状況ではないのでは…と危ぶまれるものの、全く希望が失われたわけではない。冒頭で述べた、立ち上がり始めた若い女性たちの中には、「慰安婦」問題に関心を寄せ、サバイバーに共感する人たちもいる。私も、ロラたちとリッチーさんから渡されたバトンを次の世代に渡すため、できることを続けていきたい。